
"The story of Princess RYURA" © copyright Alina hosai 2005

「りゅら姫物語」宝彩有菜 (02)

<二>

絶え間なく、揺れる、揺れる、揺れる。
泡のように、生まれる、生まれる、生まれる。
泡のように、消える、消える、消える。
泡は形。形は実体ではない。
存在は宇宙、宇宙は揺れて形を現わす。

「ですから、私もいずれ、緑髪のおばばの道場に行こうと思っ
ていますがね」
とムサビーも、緑髪のおばばの道場に、いやいやながらも行か
ねばならないと思っ
ているようです。ムサビーも修行に来た宇宙人なのでしょう。逆
にムサビーから見れば、りゅら姫もけったいな宇宙人と言
うことになります。

「りゅら姫も、道場に行く途中っすか」

「そうだ。チャンポーとか言う宇宙船の御者に、途中で降
ろされてしまった」

「あっ、あのチャンポーね。犬鼻の」

「知っているのか」

「僕の時もそうですからね。チャンポーにやられてしま
った」

「僕？ 僕って、ああ、ムサビーは男の子か」

とりゅら姫は自分の脇の下あたりで、ごろんと寝ころが
っている、ぬいぐるみのようなムサビーの、茶色の頭をそ
ろそろ撫でながら言いました。

ムサビーは気持ちいいので目を細めながら、

「えっ、オトコ？ オトコって？」

と聞きました。

「ムサビーは男じゃろう。りゅら姫は女じゃ」

「オンナ？」

櫛の木の祠の穴から、ぼっかりと夜空が見えます。その
夜空に三つの月が浮かんでいます。紫色と黄色とオレンジ
色の三つの月です。滲んだようにぼんやりと大きく浮か
んでいます。ですから夜とはいえ結構明るいのです。

と言うことは、ここは、やはり、どう見ても地球では
ありません。どれだけ遠く離れた所の星なのでしょう。り
ゅら姫は心細くなってきました。

しかし、初対面ですが、しかも、まあ、あまり頼りに
ならないような感じですが、一応ムサビーという家来が
います。

「オンナ？」

とムサビーが聞いています。

「あっ、うん。りゅら姫は女じゃ」

地球ではないですから、『男、女』も、意味が違
うのかも知れません。

「だからあ、ムサビーにも両親がいるでしょ。その
両親の母親が女、父親が男。分かったあ？」

「分かりませんねえ。ムサビーの親って三人
いますよ」

「後妻かあ。お前も苦労したんだなあ」

「ちやう、ちやう」

「じゃあ、連れ子かあ。お前も苦労人だ
なあ」

「ちやう、ちやう」

「じゃあ何なの、三人の親って」

「だから、バリオン星では、オンタ、メンタ、
ロンタの三人」

「何、その、オンタ、メンタ、ロンタ、って」

「親ですよ。親」

「親が三人も居るのか」

「りゅら姫のそこは、親は何人ですかあ」

「親は二人に決っている」

「親が二人で済むんですかあ」

「うーん」

「うーん」

二人とも腕組みをして考え込んでしまいました。

「で、ムサビーは何なの」

「コンタです」

「おい、待て、待て、オンタ、メンタ、ロンタの他に、コンタも居るのか」

「コンタはまだ親になっていないのを言います」

「ああ、子どものことか。でも待てよ、子どもにも男と女の違いがあるように、オンタ、メンタ、ロンタの違いはあるだろうに」

「それは、親になった時に決まるのです」

「何が」

「オンタになるか、メンタになるか、ロンタになるかです」

「分からんなあ、いったい、どう言うことかいな」

「だから、祝祭日に成りコンタが三人集まって・・・」

「ちょっと待て、成りコンタってなんだ」

「大人のコンタです」

「じゃ、子供のコンタは？」

「コンタ」

「ああ、そうか。そうだった。で、三人集まって？」

「だから、祝祭日に成りコンタが三人集まって、セレモニーをして妊娠したのがロンタ」

「なになに、待て待て、誰が妊娠するか分からないのか」

「そうです。三人のうち誰が妊娠するか分かりません」

「変なの」

「りゅら姫の所では決っているんですか」

「ああ、女が妊娠する。男は妊娠しない。当たり前じゃないか」

「逆は無いのですか」

「絶対に無い」

「面白味がありませんねえ」

「・・・・」

「バリオンでは誰が妊娠するか分かりませんから、セレモニーはとても興奮します」

「そりゃ、興奮するじゃろなあ。賭みたいなものだな」

「そう、確率は三分の一ですからね。」

でも最近『オンタに成り易い食事』とか、『メンタに成ろう体操』とか、『ロンタ当確体位』とかの本やビデオがやたら出てます。でもねえ、あまり成功しないようですね」

「はははは、そんなのがあるんだ。セレモニーかセックスか知らないけれど、バリオンってところは相当乱れとるな、こりゃあ」

「とんでもない。セレモニーは年一回だけです。神聖な行事ですよ」

「へえー」

「年一回だけです。七つの月が一行に並んだその日だけです。七直列聖夜って呼ばれています。」

とても大切な日ですから、ホテルなんか五年先位まで予約でいっぱいです。まあ、最近ではアテの無いのに予約だけ入れている人もいますが」

「何？、アテって」

「だから、セレモニーをするアテです。相手がちゃんと見つければいいのですが、見つからなかったら、その年は一人で七つ重なった月を見上げて『あーあっ』で嘆くしかありません。二人でも『あーあっ』です。三人きっかり気の会うのが集まると、これはもう『うおー、うおおー』になりますが、三人集まるのがなかなか難しいのです」

りゅら姫はムサビーの方に寝返りをうって、肘枕を立ててムサビーの顔を上からまじまじと見ました。

「ちょっと、いい？ ムサビー」

「はあ？」

「あのさ、あのさ、どうやって、オンタとメンタと、ええっと何だったっけ」

「ロンタです」

「そうそう、その三人でどうやってセレモニーをするの」

「セレモニーする時は、まだ成りコンタです」

「そうそう、そうだったね。成りコンタね。で、どんな風にその三人でセレモニーをするの、教えて」

「ええっ、えへへへへ」

あれあれ、ムサビーが照れています。

「いやねえ、照れちゃって、ねえ、ねえ、三人でどうやってするの」

「いいじゃないですか。どうでも」

「あれーっ、恥ずかしいの。あっあっあっ、恥ずかしいんだ。ふーん、なあーんだ、ムサビーのケチ」

「じゃあ、りゅら姫の所はどうやってするんですか」

「えっ、あっ、いやーっ、どうだろう。えっ、何が」

とりゅら姫も急に聞かれて、相当に気が動転してしまいました。

ムサビーの櫛の木の祠の外には、三つの月が滲んだように浮かんでいました。